

豚

中野
劇団

豚

作・中野 守（中野劇団）

登場人物

三上

田原

喫茶店。売り手の三上と買い手の田原が向き合って座っている。

田原 三上さん。それじゃ、三上さんの所の豚を今後うちに卸せないっ

てことですか？

三上 卸せない……。まあそちらの言い方だとそうなりますね。

田原 それって理由があるからですよ。金額的な部分ですか？ 確か

に値段を下げるようにお願いしましたけど、それでもこのご時世から考えると、そこまで買い叩いているわけでもないと思うんです。

三上

……そうかも知れません。……いやそうじゃないんです。

田原

そうじゃない……。三上さんのところの豚はお客さんにも凄く好評なんです。勿論それだけ手間がかかっていることも重々承知しています。

三上

うちがね、おたくと、……田原さんの所とお仕事させてもらうようになったのは、あなたのお父様、先代の社長さんの頃からです。

田原

ええ。四十年以上のお付き合いだと聞いています。

三上

田原サーカス団と言えば、当時は日本でも指折りの人気サーカス団でした。田原さんみたいな人気のサーカス団が、うちで芸を仕込んだ豚を使って下さっている。父はそのことを長年誇りにしてきました。

田原

……うちがサーカスでやっていけなくなっ、料理屋に仕事を変

えたのは先代、私の父の時代です。三上さんの豚はとても評判で、うちが料理屋として成功できたのには三上さんの豚のお蔭と言っても過言ではありません。

どうしてうちの豚を料理に使うんですか。

え？

料理に使うのであれば、最初から精肉用の豚として飼育すればいいわけですよ。

ところが三上さんがしっかり芸を仕込んだ豚はどういうわけか格別に味がいいんです。

知りませんよ。美味しく育ててたわけじゃないんで。

勿論わかっていますよ。三上さんの所が「げい」の豚を育てていることは。

ゲイの豚って何ですか。

……うちは動物が売りのサーカス団でした。子供たちにも人気で、ライオンの火の輪くぐり、ゾウの輪投げ、そして三上さんの豚の

シヨ―はウチの自慢の出し物でした。……いつの頃からか、動物愛護団体なんかいろいろ言うようになって。

三上

いや、そちらの事情がどうか知りませんが、少なくともうちはサーカスで芸ができる豚として売っていたわけです。それも毎回同じ芸では芸がない。常に新しい芸を日夜考えて考えて……。勿論動物愛護団体のそういう意見があるっていうのもわかっていますから、鞭を使わずに、できるだけ虐待だって言われにくい芸にしようって。まあ、芸を仕込んでいる時点で虐待だって言われれば返す言葉もないですけど、それはそれは、気も遣ってましたし。……それなのに、食用にしてたなんて。

田原

知らなかったのですか？ 言った通り、サーカスから料理屋に商売を変えたのは先代の時ですよ。

三上

……。

田原

本当に知らなかったのですか？ うちの店はホームページも開設してるし、グルメ記事にも度々載せてもらっていました。

三上

父は売った先で豚がどんな風に扱われているのか知る必要はないと言いました。売ったわけですから。自分達の手を離れるわけですから。その先でどんな調教のされ方をしていても、どういう扱いを受けていても意見を言うべきではない。だったら何も知らない方がいい、それが父の方針です。けど、食用にするんだったら……。

田原
三上

先代の社長さんはうちの豚は人気だとずっと手紙をくれていました。全部取ってありますよ。「ユメコ」は神経質だとか、「マルオ」は悪戯好きだとか。みんなお客さんに大人気だった。うちの父は、その社長さんの手紙を生き甲斐にして、より喜んでもらえる芸を豚に仕込み続けたんです。そりゃ父だって薄々気づいていたと思いますよ。サーカスの豚にしてはやたら頻繁に買われてたし。だけど、敢えて真実を知る必要はない。ところがあなたが社長になって、料理に使ってることを隠さなくなった。伝票に「どんかつ用の豚」って。それを見た時の父のやるせない顔したらありません

でした。「とんかつ用って何だよ！」って。

……手紙のことは、知りませんでした。

三上 田原 「ほかのブランド豚にもっと安くて美味しい豚がいるから、もう少し安くしてほしい」って？ だったらその安くて美味しい豚を使えばいいじゃないですか！ うちが芸の出来る豚を育ててたんです。

田原 私も父も、三上さんの所の豚が好きなんです。

三上 味がでしょ！

田原 味がです。

三上 だったら最初から食用として飼育します。それでいいじゃないですか。

田原 芸を仕込んだ豚じゃないとダメなんです。

三上 その芸を見ることもなくとんかつにしているわけでしょ？

田原 だったら、次から私が芸を見ます。

三上 何なんですかそれ。それはあなたが芸を見てからとんかつにす

るってことですか？

田原 だって、お客さんに芸を見せてから捌くわけには――

三上 そりゃそうでしょ！ だから、芸、要らないでしょ？

田原 要らなくないんです。決して無駄ではないんです。「芸は身を助く」

とは良く言ったもんです。三上さんが芸を仕込んだ豚は、本当に
評判がいいんです。

三上 味がでしょ！

田原 味がです。

三上 ……じゃあ例えばあなたのお店で作られた最高のとんかつを、毎
日出前で買ってくれるお客さんがいたとします。そのとんかつを
毎日犬のエサにしていたとしたら、どうです？

田原 三上さんの所の豚を使ったとんかつをですか？

三上 何かブーメランみたいになってますけど。

田原 犬ってとんかつ食べるんですか。

三上 食べるでしょ。喩え話なんでその辺はいいじゃないですか。

田原 何で犬のエサに？

三上 犬が喜ぶからです。そこのご主人は一度もおたくのトンかつを食べたことがなくて、毎日犬が食べていたんです。そのお客さん、流石に田原さんの所のとんかつを犬にあげていることは黙っていたのに、その家族がにあなたに言うんです。「うちのわんちゃん が毎日美味しく食べてます」って。

田原 ……サーカス用の豚が犬に食べられて、三上さんは納得できるんですか？

三上 あなたに聞いてるんです！ 納得できますか？

三上 ……いやでも、うちは人にね、食べてもらうために料理を作ってるわけですから。

三上 こっちはサーカス用の豚として育てていたわけです。

田原 でもサーカスの豚なんて、今の時代売れないじゃないですか。

三上 それをおたくが言うのはおかしいでしょ！

三上 ……こんなこと言うのはあれですが、うちが買わなければ三上さ

んはどうやって収入を得るんですか。どうやってやっていくんですか。

三上 ……普通に食用として豚を卸しますよ。

田原 芸を仕込んだ肉じゃないと、買い手なんてつきませんよ。

三上 だからもつと言い方があるでしょ？

田原 ……ちよつとこの後予定があるので、今日のところは失礼させていただきます。……今度一度是非うちに来てくれませんか？ そしたらきつと納得していただくと思っています。

三上 その前に、一度、芸を見てもらえませんか？

田原 ……。

終わり。